

SPECIAL REPORT

2019年度酪農教育ファーム認証研修会の概要

.....

本会議と酪農教育ファーム推進委員会は、2019年度酪農教育ファーム認証研修会を大阪会場（2020年1月16日～17日、貸し会議室ユーズ・ツウ）、東京会場（同1月30日～31日、ビジョンセンター浜松町）、札幌会場（同2月13日～14日、北農ビル）で開催した。3会場では、書類審査を通過した酪農教育ファームファシリテーター候補者が受講生（合計42名）となり、酪農をめぐる情勢、活動における安全・衛生の基準、ファシリテーターの役割などについて学んだ。

1. 最近の酪農をめぐる情勢等の説明

研修会の冒頭で本会議職員が、国際乳製品市場の動向、わが国の生乳需給構造の特徴、指定団体の役割、畜安法改正のポイントと課題など、最近の酪農をめぐる情勢について説明した。そのうえで、酪農教育ファーム活動の概要、酪農産業の価値向上やSDGsへの貢献等、活動の持つ可能性などについて強調した。

続いて、「『酪農教育ファーム』これまでの歩み」と題して、酪農教育ファーム20周年記念DVD「食やしごと、いのちの学び」を上映し、組織的な酪農教育ファーム活動の成り立ち、活動の目的と仕組み、現状など活動を行う上での基本的な事項について説明した。

2. 活動における安全・衛生基準に関する講演

(1) 大阪会場

愛知県学校給食牛乳協会 事務局長 木島 秀雄氏は、安全な酪農体験にするための対応ポイント、動物由来人畜共通感染症への対策、牧場（酪農）と特に関係の深い家畜伝染病（口蹄疫等）の予防対策、生乳の衛生的な取り扱い方、手作り体験で共通する注意点等について説明した。

口蹄疫に関する質問に関して次のような点を強調した。感染経路は靴底からだけとは言えない、衣服や車両などからも感染する。車両の場合、タイヤに消毒液を散布することも多いが、ムラが出るので、消毒槽の中を車に走らせるほうがより効果がある。「必要なだけやる」のではなく、「十分やる」ことが大事である。万一口蹄疫が発生したときは慌てないでほしい。大切なことは2点ある。普段から対応策を現実の問題として実践的に考えておくこと、そして確実な情報を早く把握することである。



木島先生の講演風景（大阪会場）

(2) 東京会場

千葉県農業共済組合連合会・西部家畜診療所 技術主査補 天野 はな氏は、冒頭で飼養衛生管理基準に関するクイズを実施し、続いて大阪会場と同様に、安全な酪農体験にするための対応ポイント等について説明し、最後に、防疫対策では、最新の情報を自ら取りに行くことが重要であると強調した。

質疑では、酪農教育ファーム活動を通じて、命の大切さと屠畜の意味をどのように伝えるべきかに関して活発な議論がなされた。主な意見は次のようであった。家畜も他の動物と同じように終生飼育（寿命を迎えるまで適切に飼育すること）をすべきという意見もあるが、経済動物の役割をしっかりと伝えるべきである。畜産関係者にとって、家畜の一生を全うさせるということは、健康なまま最後まで飼い、屠畜してお肉になることだと考えるべきである。そのうえで、命の大切さを知ってもらい、だから残さず食べてほしいと伝えることが大切である。



天野先生の講演風景（東京会場）

(3) 札幌会場

酪農学園大学・獣医学群・獣医学類・獣医細菌学ユニット 講師 村田 亮氏は、他会場同様、酪農体験における注意点などについて講演した。細菌学が専門の講師からは、とくに感染症予防について、感染症の成立要因（感染源、伝播経路、感受性宿主）のどれか一つでも無くせば予防できることについて分かりやすい説明がなされた。

牧場来場者がブーツカバーを履くタイミングについての質問があり、これに関して、飼養衛生管理区域に入る直前に履くのが良く、逆に、ブーツカバーをきちんと脱いでから帰ってもらうことが大事で、帰りの自動車で履いたまま乗るのは問題であるとの回答があった。また、

牛が人を舐めてしまった場合の対応については、手指など皮膚なら後で洗い流し、洋服なら消毒剤をしみこませた布で拭くことが推奨された。



村田先生の講演風景（札幌会場）

3. 「ファシリテーターの役割」を学び合うワークショップ

ファシリテーターの石川 世太氏（大阪会場・東京会場）とプロジェクトアドベンチャー・非常勤講師の藤樫 亮二氏（札幌会場）を講師に迎え、ワークショッ

プ（酪農教育ファームファシリテーターの役割）を行った。

本ワークショップの目的は、「酪農教育ファームファシリテーターの役割は、来場者が酪農体験を通して『食やしごと、いのちの大切さ』に自ら気づき、それらを日常生活に活かしていけるように手助けすること」であると参加者自ら気付くこと、そして自分自身が大切にしたい活動の「あり方」を見つけることにある。そのため、講師が「やり方」を教えるのではなく、手足を動かし、講師や参加者同士で話し、聴き、自分の考えを書いて発表するなど、様々な「体験」を通じて理解を深めた。

研修会終了後のアンケート調査において、「ファシリテーターの役割についてはもちろん、人との関わり方について多く学ぶことができた。参加者との意見交換等を通じて、自分なりのファシリテーター像を見つけられた」と、本ワークショップに関して高い評価を得た。



大阪会場の参加者の皆さん



札幌会場の参加者の皆さん



参加者の皆さん（東京会場）